

大学生のダンス創作活動における意識の変容

—教員養成課程のダンス授業に注目して—
お茶の水女子大学大学院 博士後期課程 2年
杉山 りん

【1. 研究背景・目的】

中学校保健体育科でダンスが必修化されて10年以上が経過した。体育教員を対象とした調査からは、児童・生徒は積極的にダンスの授業を受けている一方で、ダンス指導にあたり困難を感じている教員は少なくないと報告されている（若井ほか, 2021）。そのような中で中学校での指導の研究が進められているが、充実したダンス授業を行うためには教員養成課程の学びも重要であると筆者は考えている。そこで本研究では、教員養成課程のダンス授業ではどのような指導がなされ、また教職に就くことを志望する学生は指導方法をどのように学んでいるのかを調査する。

本調査によって担当教員がどのような意図を持って指導し、それを学生はどのように受け止めるのか、またその授業を受講したことによってダンスの指導観は変容するのかを明らかにする。特に今回は授業の終盤にまとめとして行われたグループ創作に焦点を当て、教員の声掛けや、学生がこれまでの学びをいかにして創作に生かしているのか、また創作活動に向かう意識の変容を学生のダンスや運動経験などのバックグラウンドも踏まえて得られたデータを分析することとした。以上の調査から、より充実した中学校ダンス授業に繋がる教員養成課程のダンス授業の在り方を探ることを目的とする。

【2. 研究方法】

関東圏の国立大学にて2023年度前期に開講された「ダンス（実習）」を対象とした。

担当教員は表現運動の指導を専門とする専任教員1名、受講生は大学2年次で14名（男子学生7名、女子学生7名）であった。

2023年4月～7月に行われた14回の授業に参加観察した。また、授業を2台のビデオカメラで撮影し、必要に応じてメモをとった。

加えて、全ての授業終了後に受講生に課された、授業の感想やこれまでのダンス経験に関する質問を含むレポートとアンケートをテキストデータとして調査対象とした。

【3. 結果】

対象とした授業で行われた内容は表1の通りであり、学習指導要領に記載されている「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」を網羅的に扱い計画された授業内容であった。

受講生を対象としたレポートとアンケートで印象に残っている内容として最も多く回答が得られたのは「グループ創作」で、次いで「わりば

表1 「ダンス（実習）」授業内容

回数	授業内容
第1回	オリエンテーション 円形コミュニケーション
第2回	リズムに乗って自由即興 2人の戦い(スローモーション)
第3回	タッチ&エスケープ (走る一止まる)
第4回	ロック・サンバ・ヒップホップのリズムの違い (同じ踊りを違う曲で)
第5回	わらべうたからヒップホップ (十五夜さんのもちつき・花いちもんめ)
第6回	ダンスバトル
第7回	ミラーの世界
第8回	新聞紙を使った表現
第9回	体の部分を使って わりばしを使って体の先まで
第10回	フォークダンス(マイムマイム・オクラホマ) グループ創作1回目
第11回	フォークダンス(バージュニアール・コロブチカ) グループ創作2回目
第12回	フォークダンス(ハーモニカ) グループ創作3回目
第13回	グループ創作4回目(中間発表)
第14回	創作発表会

表2 授業内容が印象に残った理由(抜粋)

グループ創作	わりばしを使って体の先まで
全員で自分の持っている知識を振り絞って作り上げたものなのでとても印象に残っている。	繊細な動きだったため、すごく慎重に取り組んだ。足先から指先まで体全身で集中する感じがかった。
曲に合わせてたり、 <u>見ている人のことを考えて創作する</u> といった経験ができたことで、 <u>新たな視点が加わった</u> から。	割りばしを使う斬新さ。ただ動きを真似するというよりも目をつぶって相手の動きを予想する面白さ。
表現を観客に伝えることは思うよりも難しいなと思った。また、 <u>客観的に捉えることで問題点を把握する</u> ことができるのだなと思った。	ペアの相手がどのような体勢になっているのか指先の感覚だけで想像しながら割り箸を落とさないようにするのが楽しく、印象に残った。

(下線は筆者)

しを使って体の先まで」という、道具を用いた表現を扱った内容が印象に残った授業として回答されていた。それぞれの回答理由は表2の通りである。

以上より、ダンス授業を受ける中で受講生は他者の存在を意識したり、それによって自らの身体を客観的に捉える経験を重ねていたりしたことが窺えた。

主要参考文献

若井由梨・山崎史恵・吉田重和(2021)教育現場における「表現運動・ダンス」指導時の困難さについて—新潟市内小・中学校現職教員への実態調査をもとに—。新潟医療福祉会誌, 21(2): 67-77。